

《月々の手入れ》

【4月】

4月になると前月の剪定から新芽が伸び出し、さらに成長する時期です。この新芽の成長期にはばらにとって、最も重要な「花芽分化」という時期を迎えます。

1. 花芽分化

剪定してから新芽が1~4 cmに達すると環境条件に関係なく花芽分化を開始します。気象条件にもよりますが、春の場合は3月下旬から4月上旬です。

この間にストレスを与えると花に大きな影響を及ぼします。

まだ短いですが、新芽の先端には目には見えませんが、すでに蕾を形成し花の形が出来上がっています。

つまりこの頃は、ばらの株の栄養の過不足が最も大きく影響し、コンテストのような花の容姿を競うばらでは、最も大切で重要な時期であると言えます。

ストレスとは極端な灌水、肥料、低温、高温などですが、肥料の栄養状態が普通であれば、さほど心配はいりません。

芽の伸びが悪いと言ってこの時期に追肥すると、地植え、鉢植え共に、特にHTでは花芯の乱れに繋がります。

また唯一「遅霜」など、この時期の低温が影響を与えることがあります。

その表れとなるのは、品種にもよりますが「出開き芽」、「ブラインド」(図1・図2)が多くなる場合があります。



図 1



図 2

2. 芽かき

本葉が展開し始めたころ、芽の長さが 5 cmから 7 cmごろになると花芽分化期が終わっており、芽から枝へと成長期に入ってきます。春ばらは特に各枝の芽がたくさん付きますが、図 3 から図 4 のように剪定した枝の先端から成長の速い立派な枝が順次伸びてきます。

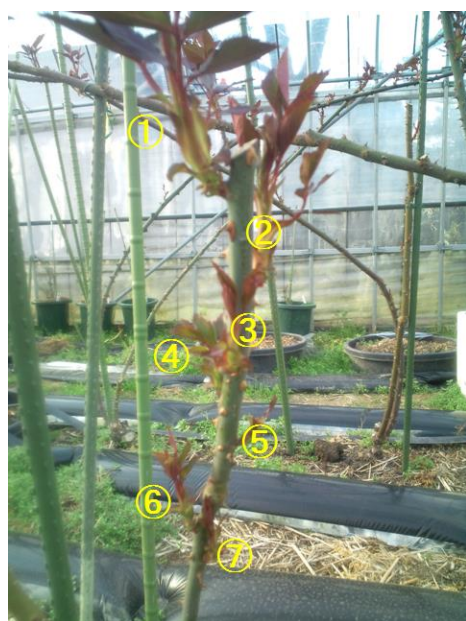


図 3

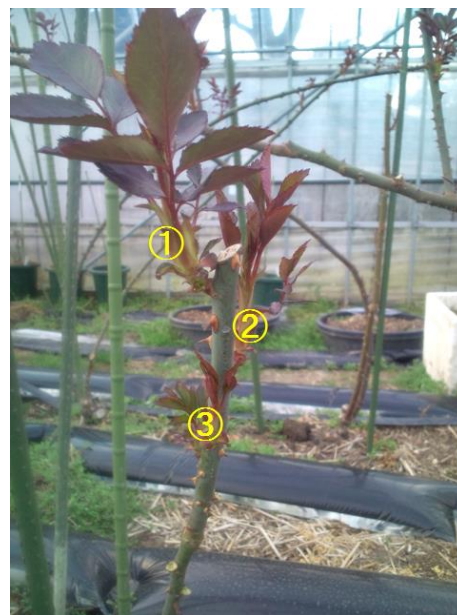


図 4

最終的に残す枝は主幹の太さが人差し指程度で 2 花、人差し指以下で 1 花、親指以上で 3 本を目安に予備枝も含めて徐々に芽数を減らして行きます。競技用の HT ではほとんどの主幹で最終的に蕾が見え出す頃に 1 花にします。

(1) 芽が何 cm になったら始める？

先端の芽が 10 cm 位から始めますが、ベテランではもう少し早いようです。

(2) どの芽から掻きますか？

1 枝全体の芽数を見て多く出た枝の下の方、つまり先端から 3, 5 芽残して掻き取ります。これらは先端の芽に比べて弱小なはずですが、2 段、3 段目で剪定してある場合は、そのつなぎ目とか下の方にたくさん出ますが、ほとんどは掻き取ります。特に房咲き種の場合は内芽の弱小枝を中心に掻き取ります。

まれに、剪定枝が 3 段目の場合、一つ下の 1 段目、2 段目に太い良い芽が成長することがありますが、これは競技用の HT 以外は残しません。

また、途中に枝の節、細枝のカットした跡がある場合はその周りからた

くさん芽が出ますが、これも最初に掻き取る芽です。
(3)すべての品種で芽かきしますか？
特に競技用のHT・FL以外の芽かきは、そんなに神経質にならなくてもよいでしょう。ただ、芽かきが必要なのは、出開き芽、ブラインド、内芽で込み合っている弱小枝等で、このような枝からうどん粉病や、ハダニなど病害虫が発生しやすいので、特に掻き取るようにします。
通常の房咲きや、つるばら、ミニバラなどは芽かきまで手が回らないことや、弱小枝でも花をつけることがあるので、あまり気にしなくてもよいでしょう。



図 5



図 6

(4) 株元(クラウン)からシュートのように新芽がたくさん出てくるが残すべきか。

答えは残すべきではありません。全部掻き取ってください。この時期はシュートのように太く立派に育ちません。せいぜい花枝として1本だけ残してもさほど良い花も咲きませんし、ステムも細いままです。



図 7

(5) 競技用HTの芽かき

最も重要な作業で、どの主幹枝からも最終的には1本の芽だけにして、枝を育てます。しかし、芽の小さいうちから頂芽の1芽だけを残すのではなく、徐々に少なくする作業で、展示会の開催日に合わせて予備枝も含めて2, 3芽の成長をみて、最終判断は20cmから25cmで最後の1芽だけにして、あとは掻き取ります。早めに1枝にしないと成長が遅れます。

2枝以上立てるとステム(花枝)が65cm取れない品種があります。昨年の太い立派なシュート枝でステムの長さが心配ない品種(手児奈、マダムビオレ、メルヘンケニギン等)では2本立てることもあります。これらは1本では花首から50cmの位置でステムの直径が6~9mmが理想的ですが、10mmを超えるようだと太すぎてどんなに立派な花をつけても失格となるので、ベテランは太いシュートの処理では2段目からV字型に2本に分けて調整しています。

また、ジェミニ、コロラマなど、これらを親にした(ホット神崎、ユートピア、ノービー、卑弥呼)品種ではいくら主幹が太くても2本花枝を立てると、栄養が分散し2本とも65cmに育たない場合が多く、共倒れとなります。

3. 施肥

ばらは多くの肥料を必要としますが、与え過ぎには注意してください。肥料過多失敗は、この時期に多くみられます。

(1) 地植え

リン酸(P)、カリ(K)主体の冬の元肥を前月までに施してある場合は今月の施肥の必要はありません。これだけでも土中でカリの働きにより白根が多く発生し残留窒素を取り込みます。これが証拠にP・Kを多く与え過ぎると窒素分を与えていないのに太い枝と大きな葉が出て、葉などは大き過ぎて不利になることがあります。しかしこれは地植えのそれぞれの土壌の違いや前年までの施肥量等環境の違いが、大いに関係すると思われます。

また、よく芽だし肥として剪定の後に与える必要は特にありません。房咲き種やつるばらなど花をたくさんつける品種には花芽分化が終わった後、窒素(N)を含んだ有機ボカシ肥料を追肥することでより綺麗に咲きます。ただし、競技用HTでは窒素の使い方に注意をし、特に「手児奈」は追肥主義で(N)を利かせることで立派な花が咲きます。よってほとんどの品種は寡肥料でよい花を咲かせますが、ベテランは、肥料特に窒素の使い方に経験が生きます。

窒素分は多すぎると花の芯や花弁を乱したり、葉や茎を大きくし過ぎたりしますが、不足すると花が小さくなり茎や葉も貧弱なばらとなります。

(2) 鉢植え

鉢植えの場合は、今月から毎月1回の追肥開始となります。鉢土の上に一般的な有機ボカシ肥料を10号鉢で100gくらいを置き肥します。決して鉢土と混ぜる必要はありません。

4. 灌水

今月からは好天が続くようになるのと、花芽分化も終わり気温の上昇とともに芽がどんどん成長する時期です。地植えも鉢植えも表面が乾いたらたっぷりと与えます。地植えの場合は1株に100以上、鉢植えでは鉢底から流れるくらいです。

両方とも毎日少しずつ灌水するのではなく、表面が乾いたら十二分に与えるようにし、加湿気味よりも乾燥気味に育てることが白根の成長には有効です。

また鉢底には長期間留守をする場合を除き、鉢皿など絶対使用しないでくだ

さい。

水遣りの時間帯は早朝から午前9時ごろまでがベストです。気温の上昇する日中にはあまりやらないでください。また、よく晴れた日の朝に水やりが葉にかかると葉の水滴がレンズの役目をして葉焼けしてしまうことがあります。これから夏期にかけては特に夕方の水遣りをお勧めします。

競技用HTでは地植えの灌水技術も重要で、枝の伸びない品種及び多肥料品種は多目の灌水、枝のよく伸びる品種、寡肥料品種は控えめ、もしくは全く灌水しないで仕上げる品種もあります。両方とも開花2週間前には灌水を止めることも行います。

5. 競技用ばらは地植えか鉢植えか

競技用HTは肥料コントロールが重要な要素であることから、敢えて肥料コントロールのし易い鉢植えで成功する品種もあります。これらは品種により各個人により諸説ありますので、ベテランの方からいろいろと話を聞くことも大切になります。

特に鉢植え向きの品種は、ステムが長く寡肥料品種であり、逆に不向きな品種は発育に癖があり、ステムが短めの品種に多い。

地植えは概ねどんな品種でも適性がありますが、総じて寡肥料品種は肥料コントロールが難しいので不利になります。

また、FL(フロリバンダ)等の房咲き品種では、圧倒的に地植えが有利です。

6. 消毒

現代ばらはその美しさを追求する交配が続いたため、病害虫に弱い品種が多く、残念ながら農薬を用いた消毒をしないと美しく咲きません。病気に強い品種もありますが、まだ数が少なくこれからの課題となっています。

ばらに使用する農薬は、食用の野菜や果物に使われる農薬と変わらず、むしろ安全な薬剤で人畜には無害ですから使用法を守って安全に取り扱います。

4月に入り新芽が伸び出し、ステムへと成長し出す時期、当地では4月中旬から気温の上昇とともに蕾が見え出すころ、害虫であるアブラムシが新梢、蕾の先に表れ始めます。この時期から今シーズン第1回目の消毒を始めます。最初はアブラムシなど初期害虫に効果のある総合的殺虫剤やこれから発生するうどん粉病や黒星病の予防殺菌剤を使用します。

消毒器具は栽培株数に応じて、噴霧器等の専用器具を装備してください。

最初の1, 2株までならスプレー式も使いやすいですが、噴霧器を装備した方が、特に4月最初の消毒は各薬剤を薄めに散布した方が良いでしょう。

葉がまだ柔らかく弱いので殺虫剤、殺菌剤等既定の希釈倍率の1.5倍から2

倍ぐらいの薄めの薬剤で散布してください。例えば規定 1000 倍の薬剤なら 1500 倍～2000 倍に希釈しましょう。

強い薬剤によって弱い葉が障害に合い(薬害)大切な葉を台無しにしてしまったら何にもならないからです。薄めの消毒は4月中旬から2回ぐらいでよいでしょう。

薬剤を薄めに希釈するのと同様に展着剤、活性剤(木酢液、竹酢液、ニーム等)、液体肥料も薄めに混合して使用しています。

マシン油や硫黄合剤以外はばらの薬剤・活性剤は混合しても問題ありません。一部にアルカリ性液体と相性の悪い薬剤もあるので説明書をよく読み使用してください。

消毒は年に数回行うので、殺虫剤・殺菌剤は何種類か用意しローテーションして使用してください。

黒星病(黒点病)が発生したら早期治療以外は回復が難しいので、予防防除以外ありません。

うどん粉病も予防と治療剤は種々ありますので専用の薬剤を使用します。

ハダニには専用の薬剤を散布する必要がありますが、薬剤に対する耐性が強く年々以前の薬剤が効かなくなってくるので、発生もしないのに多用は禁物です。最近では究極で良く効く薬剤もありますが、アマチュアのばら栽培では高価で量が多く使いきれないので、何人か共同で購入することをお勧めします。

いずれにしても日頃の観察を徹底し、予防に努めることが大事で、発生してしまっただけからの治療はなかなか厄介なものとなります。また早期発見・早期治療が大切です。

消毒の時間帯は朝・夕がベストで、散布するときは帽子・マスク・ゴーグル・手袋・雨合羽など最低限の装備を心がけてください。

◎1回目 4月中旬 展着剤アプローチB I 1500倍、竹酢液 1000倍、アミノ酸エキス 2000倍、ダコニール乳剤 2000倍、オルトラン水和剤 2000倍

◎2回目 4月下旬又は5月上旬 アプローチB I 1000倍、竹酢液 1000倍、アミノ酸エキス 2000倍、スミチオン 1500倍、オーソサイト 1000倍

(1)害虫対応

この時期に害虫のアブラムシやバラキクバチの強襲にあつたらマラソンやスミチオンを既定の 1000 倍の希釈液で単用散布します。ただし、羽のあるバラキクバチやハキリバチ、バラゾウムシなどは薬剤散布で飛び立って逃

無断複製及び外部持ち出しを禁ずる

げ、忌避剤であってなかなか退治しにくいので、見つけたら捕殺するしかありません。

オルトランなどの顆粒剤を鉢や地植えの株周りの土の上に撒くだけでも、アブラムシやバラキクバチ等の忌避剤として効果があります。開花時のスリップス(アザミウマ)などにも効果があります。これは安価で使い易い薬剤です。

(2) うどん粉病対処

4月中旬以降は、うどん粉病が発生しやすく、朝夕の気温が急激に低温になる時ですが、最初に見つけたら予防剤だけでは退治できないので、専用治療剤を用います。

サンヨール乳剤、パンチョ顆粒、サルバトーレME液剤、ストロビーDF(ドライフロアブル)などと予防剤のオーソサイト水和剤、ポリキャプタン水和剤、カリグリーン、ダコニール、フルピカFなどとどれか1種類ずつ混用して退治します。ストロビーDFはばらや花卉類には薬害の恐れがあるので、規定量より薄めに使用しましょう。

この時期は黒星病はまだ発生しませんが気温が高く、雨が多くなると発生するので予防対処を行ってください。

なお、最近話題となっているネオニコチノイド系の殺虫剤はミツバチに悪影響を及ぼします。欧州ではほとんどの国で禁止されています。なるべく使用を控えるようにしましょう。

ネオニコチノイド系殺虫剤

アドマイヤー、モスピラン、ベストガード、ダントツなど